

2025年8月28日(木)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏠 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-1]

心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[競技スポーツ-SA-2]

アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-3]

車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹ (1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 🏠 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター:出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-1]

国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[競技スポーツ-SB-2]

豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国士館大学大学院)

[競技スポーツ-SB-3]

日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-1]

子どもの運動を支える「親子の三間」

家庭と地域の実態とその展望

*香村 恵介¹ (1. 名城大学)

[生涯スポーツ-SA-2]

なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)

[生涯スポーツ-SA-3]

スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-1]

競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

[生涯スポーツ-SB-2]

パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

[生涯スポーツ-SB-3]

“生涯スポーツライフ”を拓けるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／フレイル研究最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-1]

フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

[健康福祉-SA-2]

糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

[健康福祉-SA-3]

シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

[健康福祉-SA-4]

多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える—誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ—

コーディネーター:檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-1]

国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2]

インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

[健康福祉-SB-3]

性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

[健康福祉-SB-4]

幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関わり向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-1]

インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

[スポーツ文化-SA-2]

スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか

アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

[スポーツ文化-SA-3]

紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-1]

運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響

教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

[スポーツ文化-SB-2]

学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化

体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

[スポーツ文化-SB-3]

子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-1]

男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

[学校保健体育-SA-2]

多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

[学校保健体育-SA-3]

体育は多様性を受け入れることができるのか？

ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-1]

拡張のみちのりとしての「外化・内化・新内化」

その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

[学校保健体育-SB-2]

ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

[学校保健体育-SB-3]

「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

競技スポーツ研究部会における解決すべき上位課題の一つが、「競技スポーツをどのように豊かにするか」である。日本の指導現場では「アスリートセンタード」という言葉が広く使われているが、競技スポーツの発展には、選手の幸福だけでなく、スポーツ指導者がいかに充実感や幸福を感じ、自己実現を達成できるかを考えることも不可欠である。そこで、2025年度の課題Aでは「スポーツ指導者の幸せとは」をテーマにシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、日々アスリートを指導する指導者が、指導の中で自己をどのように成長させ、QOL（生活の質）やワークライフバランスを維持していくのかについて議論する。また、そんな指導者をコーチングや心理学など多様な視点から支援する専門家を招き、指導者の心理的負担および自己実現に関する課題に対して、専門的知見に基づいた提言と支援の方向性、さらに今後の展望についてご講演いただく。

指導者の心身が充実していなければ、質の高い指導を行うことは難しく、結果として選手の能力を最大限に引き出すことも困難になる。本シンポジウムを通じて、スポーツに関わるすべての人がより幸福を感じるために何が必要なのかを、登壇者・参加者と共に考える場としたい。

[競技スポーツ-SA-1]

心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[競技スポーツ-SA-2]

アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-3]

車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹ (1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-1] 心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

<演者略歴>

博士(学術)を取得して2020年起業。(株) BorderLeSS代表取締役としてメンタルトレーニングの普及活動、後進の育成を行う。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士としてジュニアからトップアスリート、指導者、ビジネスパーソンなど様々な方にメンタルトレーニング、心理サポートを行う。

指導者、特に監督やヘッドコーチになれば意思決定をする場面も多く、勝敗の責任を背負っている立場として非常にプレッシャーのかかるポジションである。そのため練習や試合、遠征、合宿と休日返上で現場に出て身体的に疲労するだけではなく、見えない心理的疲労も多くあると考えられる。日頃スポーツ心理学に基づくメンタルトレーニングの専門家として、指導者の方に携わる機会が多いが、「選手に成長してほしい」「選手には心身のコンディショニングをしっかりとしてほしい」などといったように選手に対するコメントが多い傾向にあり、自分自身のことは後回しになっている印象を持つことも少なくない。

実際、アスリートを支える人々であるアントラージュの重要性が謳われているが、指導者のアントラージュに関してはまだ議論が進んでいないと思われる。また、アスリートのキャリア支援の重要性はスポーツ庁もその必要性を発信しているが、指導者のキャリア形成も課題が多いと考えられる。

そこで本シンポジウムでは、指導者の抱えるストレスとの付き合い方について、自分自身によるセルフマネジメントと他者の存在によるソーシャルサポートの両側面からのアプローチを示し、皆様と議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ㊦ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-2] アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学教授。博士（学術）。コーチング学を専門とし、国内外でコーチの成長支援に取り組んでいる。NSSU Coach Developer Academy (NCDA) のディレクターとして、国際的なコーチデベロッパー養成にも力を注ぎ、さまざまな側面からコーチの学びと実践を支える活動を行っている。

アスリートセンタード・コーチング——それは何を意味するのか。アスリートファーストとは何が違うのか。なぜ、今この概念が改めて問われているのか。そして、それはスポーツ指導者に何をもたらすのか。これらの問いを起点に、シンポジウムでは皆さんと共に考えていきたい。

セリグマンは、持続的幸福の構成要素として、肯定的感情、深い関与、意味や意義、達成、関係性を挙げている。スポーツ指導者が「有能感への欲求」を抱いているのは自然なことであり、「自分が勝ちたい」と思うこともまた、人として当然の感情だ。采配や指揮が求められる競技では、指導者同士が明確に勝負の一部を担っており、そこでの判断や戦略が競技結果を左右する。

加えて、指導者にとって「自律感の欲求がどのように充足されているか」も重要な視点である。アスリートのニーズに応えることが、指導者自身の意思による選択であれば、自らの価値を実感しうるだろう。しかし、義務感や周囲の期待に応じるだけの行為であれば、自律性はむしろ脅かされる可能性がある。

アスリートを“ファースト”にすることで本当によいのか。アスリートセンタード・コーチングをより豊かに発展させていくために、本シンポジウムでは、あえて挑戦的な問いを投げかけてみたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-3] 車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹(1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

<演者略歴>

2000シドニーパラリンピック男子代表選手、2012ロンドンパラリンピック男子代表アシスタントコーチ、2026リオパラリンピック男子代表ヘッドコーチ、2021東京パラリンピック男子代表監督(銀メダル)、2021-2023一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟専務理事、2023-2025理事

車いすバスケットボールという競技において、アスリートを指導すること、チームを強化していくとはどういうことか？という大きな問いがある。選手の身体の状態は、下肢、上肢など、障害は多様であり、そのレベル(重度・軽度)も様々だ。そもそもインターネットや書籍などで得られるスポーツに関する情報は健常者と言われる選手たちのものであることが多い。常識的なことでも多くの情報は全く通用せず、しかしあるものは大変なヒントや答えになる。指導者として、選手たちと一緒にどうしたら強くなるのか、うまくなるのか、勝てるチームを作れるのかは、手探りであり、自分たちでその答えを導き出していくプロセスが重要になる。そして、答えを明確に探し出すことが難しいこのパラスポーツの世界で選手と一緒に強化、成長に注ぐ時間や機会は指導者にとっての醍醐味だと感じている。

指導においては、健常者のスポーツと目指すゴールは一緒であり、原則的なところでは同じであるものの、様々な観点での大きな違いがあることも事実だと思われる。本シンポジウムでは、パラリンピックの日本代表強化をはじめ、様々な観点でその経験を振り返り、その違いとは何か？を共に考える場としたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

Ⓖ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 Ⓖ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

2000年に策定された「スポーツ振興基本計画」により、日本の国際競技力向上は正式に「国策」として位置づけられ、今日まで数々の関連施策が展開されてきた。その結果、オリンピック等での日本のメダル獲得状況は改善し、それらを指標とした日本の国際競技力は相対的に向上している。しかし、国際競技力向上の目的は、単にオリンピック等でのメダル獲得数を増やすことにとどまるものではない。すなわち、そのプロセスと結果等を通じて、スポーツ分野のみならず国家・社会の発展や人々のウェルビーイング（幸福や健康）の促進に寄与するなど、より大きな意義を持つものでなければならない。

日本を含め競技スポーツに力を入れている国は、メダル獲得状況を国際競技力の評価指標とし、それを基に向上施策の成果を判断している。そして、国際競技力向上の意義や社会への効果については、日本の場合、「夢」「希望」「活力」「国際理解」「プレゼンス」などの漠然としたものであり、具体的な根拠や示唆を得られる議論はほとんど行われていない。そこで、本シンポジウムでは、国際競技力向上の意義や目的を深く掘り下げ、それが豊かな社会の実現にどのようにつながるかを議論する。これにより今後の国際競技力向上策の在り方について、その方向性などを見出すことを目指す。

[競技スポーツ-SB-1]

国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[競技スポーツ-SB-2]

豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

[競技スポーツ-SB-3]

日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-1] 国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

<演者略歴>

筑波大学大学院体育研究科修了。法政大学大学院政策科学専攻修了。スポーツ庁参与、日本パラリンピック委員会（JPC）運営委員会委員・特別強化委員会委員、英国ラフバラ大学客員研究員、国際スポーツ強化拠点連合（ASPC）アジア大陸理事、世界レスリング連合（UWW）テクニカル委員会委員・科学委員会委員、日本オリンピック委員会（JOC）情報戦略部門部門長、日本レスリング協会ナショナルコーチ兼テクニカルディレクター、専修大学教授などを歴任。

ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、国立スポーツ科学センター（JISS）、HP戦略部、連携・協働推進部、国際情報戦略部、運営部等で構成されている。これらの部門は、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会などと連携・協力し国際競技力向上のための事業を展開している。HPSCの事業目的は、国際競技力向上である。スポーツ医・科学、情報面からの支援、アスリートの発掘・育成への関与、地域や大学との連携・協力、国際的なネットワークの構築と人的交流など様々な事業展開を行っている。また、JISSにおいては「JISSプラン2034」を作成し、知見の共有や人材育成なども視野に入れ外部への情報共有を図っている。さらに、HPSCは組織内外の情報についても広く展開する試みを実施している。具体的には、パッケージの地域への展開やフォーラム、カンファレンス、大学との連携講義の設定など、ハイパフォーマンス領域で得た知見を加工してライフパフォーマンスの向上を考慮した取り組みを始めている。さらに、2025年大阪・関西万博では、国連と連携しスポーツを通じた開発と平和へのフォーラムやオーストラリアパビリオンでの東京2020大会のレガシーでの発信も行なっている。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-2] 豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

＜演者略歴＞

体育・スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学、筑波大学を経て、現在国土館大学大学院特任教授。教育学博士（筑波大学）。日本スポーツ体育健康科学学術連合代表、前日本体育・スポーツ・健康学会会長、前日本スポーツ社会学会会長（現在顧問）、前文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

国際競技力向上をめざすトップアスリート養成は、これまで＜発掘→育成→強化＞という時間軸でそのパスウェイが想定され、ひたすらメダル獲得に向けた施策や事業が展開されてきた。しかし、今日の国際的なスポーツビッグイベントにおけるゲームは、スポーツそれ自体のゲームと並行して、あるいはそれ以上に国際政治における政治的ゲームやグローバル経済における経済的ゲームのアリーナ（場）と化している。トップアスリートのパフォーマンスは否応なくこの2つのゲームに巻き込まれる身体性を有しているのだ。多額の税金や経済資本を投入して養成されたトップアスリートは、これら2つのゲームの手段や消費・消耗的な存在であってはならないだろう。これから求められる豊かな社会が、これまでの消耗・消費を最善とする産業型社会とは異なり、成熟型社会の循環・共生的ライフスタイルによって実現されるとすれば、トップアスリート養成の社会的意義はどのように変化せざるを得ないのであろうか。本報告では、文明（テクノロジー）と自然（エコロジー）の最前線（フロンティア）に身を置くトップアスリートだからこそ実現可能な両者の融和への示唆やその危機に対する予知的可能性といった、ポスト「強化」における「活用」の観点から新たな社会的意義について論じる。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月28日(木) 15:00～17:00 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

<演者略歴>

- ・2004年 アテネオリンピック 陸上競技女子ハンマー投 出場
- ・2019年 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程 修了 (スポーツ健康科学博士)
- ・日本陸上競技連盟 理事、強化委員会ダイヤモンドアスリート プログラムマネージャー

日本陸上競技連盟は2014年より、競技者育成指針と連動した強化育成パスウェイの一環として、競技力と共に人間性・国際性を備えた人材を育成する「ダイヤモンドアスリート (DA) 制度」を展開し、修了生の約3割が国際大会に出場、金メダル獲得者も輩出している。本制度では、専門家を招聘して行う語学 (英語)・栄養・心理・リーガル・メディア対応・金融リテラシー等の研修や、海外での競技活動を通じて、国際的な舞台で活躍する際に求められる素養を備えると共に、競技引退後にもスポーツ界や国内外の社会で活躍できる次世代人材の育成も目指している。第8期には、他競技団体へのヒアリングを通じて得た多面的育成の成功例を分析した。一方、陸上競技は専門化の遅さや進学時の環境変化の特性を踏まえ、高校生から大学2年生までを対象とする従来の選考方針を維持しつつ、他競技の知見を制度の強化に活かした。第11期生では、プレッシャーへの配慮としてDAの前段階に「Nextage」を設け、また主体性を重視した自薦制の導入等、選考・支援体制の改革を進めている。本発表では統括団体の立場から、「豊かな社会の実現」に貢献するアスリート像の構築に向けた育成の在り方を共有する。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

日本の出生数は約15年前から3分の2に減少している一方で、「運動している子ども」の割合は変化していない。そのため、実際に運動やスポーツをしている子どもの数はどんどん減少している現状にある。また、働く母親の増加、手軽に楽しめるスクリーンデバイスの普及など、子どもを取り巻く環境や社会情勢はここ数十年で変化している。それに伴い、子どもや保護者の運動・スポーツに対するニーズや価値観も多様化してきていることがうかがわれる。

従来と同じアプローチに反応してスポーツをする層だけを集めていては、これ以上のスポーツ人口の増大は見込めないかもしれない。例えば、種目ごとにあるスポーツ協会は、それぞれの種目の競技人口を増やすことに依然として目を向けすぎではないだろうか。運動・スポーツの指導者や関係者は、自身が子どもの頃と同じように子どもがいるという感覚は改め、少ないスポーツをする子どもたちを取り合うのではなく、新たなニーズや価値観をもつ層を取り込むための視点や取り組みが必要である。

「多様化するスポーツ」とは、スポーツをする場所（学校、地域、スポーツクラブ、オンラインなど）や楽しみ方（価値観、参加スタイルなど）が多様になり、子どもが自分に合った形でスポーツを楽しめる選択肢が生まれつつある状況を指す。こうした多様な機会を生かし、より幅広い子どもたちがスポーツにアクセスできる環境を整えていくことが、今まで届かなかった子どもたちにもスポーツの魅力を伝え、スポーツ人口を拡大するために欠かせない視点ではないだろうか。

本シンポジウムでは、特に幼児期や児童期の子どもにフォーカスを当て、少子化時代に多様なスポーツの機会、価値を子どもに届け、スポーツ人口を増やすにはどうすればよいのか？様々な立場のシンポジストの具体的な取り組みやアイデアを共有し、生涯スポーツ社会の実現に向けた子どものスポーツの未来について考える。

[生涯スポーツ-SA-1]

子どもの運動を支える「親子の三間」

家庭と地域の実態とその展望

*香村 恵介¹ (1. 名城大学)

[生涯スポーツ-SA-2]

なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)

[生涯スポーツ-SA-3]

スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

**[生涯スポーツ-SA-1] 子どもの運動を支える「親子の三間」
家庭と地域の実態とその展望***香村 恵介¹ (1. 名城大学)

< 演者略歴 >

2008年に岐阜県スポーツ科学トレーニングセンターで測定業務専門職員、2014年より京都文教短期大学で幼児教育に携わる。2015年、同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科を修了（博士：スポーツ健康科学）。2018年に静岡産業大学講師を経て、2020年より名城大学農学部および大学院総合学術研究科にて准教授を務めている。

子どもの身体活動をめぐる環境は、この20年で大きく変化している。かつては放課後や休日に友達と自由に遊ぶ姿が一般的だったが、現在は幼児の約半数が平日に園外で外遊びをまったく行っておらず、小学生でも高学年女子を中心に外遊びをしない子どもが3～4割を占めている。一方で、習い事の参加率は上昇しており、2019年時点で小学生の約8割が何らかの習い事を行っている。自由に遊ぶ時間は減り、費用をかけて運動機会を得る構造が広がっている。筆者が関わった笹川スポーツ財団の調査では、世帯年収が低いほど運動系の習い事をしていない幼児の割合が高く、年長児では高所得層と低所得層の間に40ポイントを超える差が確認された。運動習慣の獲得が家庭の経済状況に左右される実態が明らかになっている。

このような子どもの現状の背景には、「親子の三間」（時間・空間・仲間）のあり方が関係している。同調査では、親子で体を動かす頻度が高い家庭ほど幼児の運動時間が長く、「親子でまったく体を動かさない」家庭に比べ、「ほとんど毎日」遊ぶ家庭では週あたり7.5時間の差があった。また、両親とも週1回以上運動している家庭では、そうでない家庭よりも運動時間が約1.2時間長い。さらに、保護者同士のつながりがある家庭の子どもほど、運動時間が長い傾向も示されている。

本発表では、こうした調査結果をもとに、子どもの運動習慣を支えるために必要な視点として、①保護者の時間確保と意識啓発、②家族と一緒に、または自宅でも体を動かせる環境の整備、③地域コミュニティや仲間づくりの支援、という三つの柱を提案する。それぞれの柱に対応する実践として、大学での学生向け授業プログラム、親子で参加できるスポーツ環境や動画を活用したアクティブなスクリーンタイム、公民館を活用した親子や異年齢の運動遊びによる交流機会などを紹介し、「親子の三間」を支える取り組みの方向性を考察する。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する一子どものスポーツの未来ー

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-2] なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)**<演者略歴>**

小中学校教員(1995年～)、岐阜聖徳学園大学(2008年～)、東京学芸大学(2016年～)、2025年より椋山女学園大学教育学部教授。博士(学校教育学)。主な著書に、持久走・長距離走の授業革命ー「つらいだけ」から「楽しい」への実践アイデア(2025年)、スポーツと君たちー10代のためのスポーツ教養(2019年)がある。2021年ランニング学会賞受賞。

体育授業は、子どもの豊かなスポーツライフの実現に寄与することが目指されている。小学校から高等学校まで必修であり、実に多くの時間をかけて運動・スポーツの学習を実施している。しかしながら、少なくない数の体育嫌い・運動嫌いを生んでいることは現実であるし、その代表格は持久走・長距離走(以下、ランニング)の授業である。この状況は改善されるべきであるが、一向にその兆しは見えず、ランニングの授業自体が豊かなスポーツライフの一場面とはなっていないと思われる。この状況を生み出している責任を教師や子どもといった個人に見出そうとするならば、問題を改善することは難しいであろう。

アイリス・マリオン・ヤング(2022)は、社会における不正義を改革するには、自己責任から政治責任へ目を向ける必要性があると訴えている。また、2025年はじめに放送されたTBS系ドラマ「御上先生」において、主人公の教師が「The personal is political」(個人的なことは政治的なこと)を用いて話題となった。ランニング嫌いを生んでいる体育授業の責任は、教師や子ども個人にあるのではなく、ランニングを取り巻く政治や社会の構造にあるとは言えないだろうか。

例えば、小学校学習指導要領解説体育編(2018)には、体づくり運動に「かけ足」あるいは「持久走」としてランニングは位置づいている。すなわち、「ランニング＝体力向上の手段」であり、その魅力を味わわせにくい状況をつくり出している。あるいはメディアはトップアスリートスポーツとしてのランニングを報道する。これらは「ランニング＝速さ(苦しさ)」といったステレオタイプを社会全体に浸透させており、その状況が、速く走らせること/走ることを、教師/子どもに強要しているとは考えられないだろうか。

一人でも多くの子どもが運動・スポーツを楽しみ、豊かなスポーツライフを実現することを目指して、体育授業におけるランニングの現状を契機として考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-3] スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

<演者略歴>

1990年学生時代にサッカースポーツ少年団ボランティアをはじめ、1994年より故郷である磐田市にてサッカークラブの指導を継続。2006年サッカークラブをNPO法人化しクラブマネージャーとして勤務。日本サッカー協会公認B級コーチ、フットサルC級コーチ、磐田サッカー協会技術副部長。

近年、スポーツクラブへの加入率が減少傾向にある。私たちのクラブでも、この5年間で約30%の減少が見られた。全国的にも、小学校5・6年生の加入率が大きく減少しているというデータ（2022年 笹川スポーツ財団）がある。背景には、学校部活動の地域移行により学校での活動機会が減ったことがあるが、民間や地域クラブへの流入も想定ほど伸びておらず、全体として競技人口が減少している。

もう一つの要因として、子どもや保護者のスポーツに対する価値観の変化が挙げられる。従来の「勝ちたい」「上手くなりたい」といった競技志向から、「楽しい」「仲間と関わりたい」といった楽しさやつながりを重視する傾向に移行していると感じている。

そこで私たちは、スポーツをもっと気軽に、誰でも楽しめる「遊び」のようなものにしたいと考え、遊びの要素を取り入れた「サッカーあそびスクール」や「親子deボルビ」といったプログラムを実施している。また、幼稚園や保育園を訪問し、保育時間内に「リーベ式運動あそび」や「出前サッカーあそび」も展開している。

これらの活動により、運動が苦手だったり内向的だったりする子どもがクラブに参加し、ボール遊びやスポーツの楽しさを体感している。一方で、運動が得意になった子どもが、より競技性の高い環境を求めてクラブを移るという傾向も見られる。

こうした状況から、「競技を本格的にやりたい層」と「楽しむことを重視する層」との二極化が進んでいるのではないかと感じている。そしてその背景には、「苦しいことを乗り越えることが競技力向上につながる」とする社会的な価値観も影響していると考えられる。

私たちは、幼少期には親子や仲間と気軽にスポーツを楽しみ、その過程で「もっと上手になりたい」「競技に挑戦したい」という自然な欲求が育まれることが、結果として持続的な競技力向上につながることを示していきたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

競技レベルの高度化、商業化やテクノロジーの進化によって、トップ（エリート）スポーツの分野はある種の臨界点にきているといわれて久しい状況である。それでも多くのトップアスリートが「進化」という言葉を口にするように、まだまだ右肩上がりのモデルを追求しなくていけないトップ（エリート）スポーツの世界に内在するイデオロギーが存在する。その一方、日常生活に根づいた環境で楽しむ、グラスルーツのスポーツの世界が連綿と存在する。この両者のギャップはますます深まるばかりである。これはまさしく、経済成長や限られた人の富を追求することからの社会的歪みや地球規模での環境の負荷を経験する日常社会と同じコンテキストにある。こうした社会を是正するために掲げられた国連のSDGsに向けた目標の多くは、スポーツの世界の歪みにも当てはまると思われる。持続可能な「生涯スポーツ」社会を実現することはSDGsに向けた目標の達成にも相通じるものがあるという観点から企画されたシンポジウムの第二段としての位置づけである。昨年度は「スポーツの持つ公共性」「スポーツ格差」の面も含めてこの両者のギャップの解消策を模索した。2年目の今回は、「パスウェイ」という観点到焦点を当てて上記の課題に取り組む。「パスウェイ」という概念が、わが国ではともするとアスリートの早期発掘、育成といったトップ（エリート）アスリート層に限定されたものと理解される傾向にある。グラスルーツからトップまでの連続性、それに向けてのグラスルーツの底辺の拡大、学校スポーツから地域スポーツへの連続性、アダプテッドスポーツにおける課題と一般的競技スポーツとの関係性、アスリートのキャリアパスと引退後の生涯スポーツサイクルへの循環論等さまざまな側面から議論を深める機会とする。

[生涯スポーツ-SB-1]

競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

[生涯スポーツ-SB-2]

パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

[生涯スポーツ-SB-3]

“生涯スポーツライフ”を拓けるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-1] 競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

<演者略歴>

東京都港区出身。早稲田大学大学院スポーツ科学学術院修了。フリースタイルスキーエアリアル種目全日本選手権優勝、日本代表としてワールドカップ等を転戦。引退後、日本代表コーチを経て、JOC、JSCにて主にタレント発掘・育成事業、アスリート育成パスウェイの構築支援事業を担当。2024年度より仙台大学に着任。

「パスウェイ」という言葉が我が国のスポーツ政策の文脈で初めて登場したのは2016年にスポーツ庁から発表された「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）」である。同年には日本スポーツ振興センター（JSC）が「アスリートパスウェイの戦略的支援事業」を開始し、2019年衣笠らが「日本版FTEM」を開発、発表した。FTEMはFoundation、Talent、Elite、Masteryの頭文字をとったもので、オーストラリア国立スポーツ研究所で開発されたアスリート育成パスウェイの枠組みであり、2013年に発表された。このFTEMフレームワークでは人がスポーツの土台となる遊び・動作に触れるところからトップアスリートに至る過程を10段階に分けているが、日本版FTEMでは日本の文化的・社会的背景を考慮し、11段階に分けられた。現在この日本版FTEMを活用し、アスリートがスポーツをしていく中で経験するであろう事柄を競技レベル（段階）によって整理しつつ、各段階において必要な育成環境やプログラム、次の段階に進むためのシステム、コーチや関係者の役割などを明確化し、それぞれのスポーツにおけるアスリート育成パスウェイ（競技別パスウェイモデル）を関係者の共通認識として共有する活動が行われている。この競技別パスウェイモデルの作成にあたっては、トップコーチだけでなく、例えば地域のジュニアコーチや医科学スタッフ、競技団体の事務局など様々な関係者の意見を統合する。競技別パスウェイモデルは、そのスポーツを「する人」の指標となるだけでなく、「ささえる人」の共通言語を構築し、連携・協働を促すことで、「する人」が歩むアスリート育成パスウェイをよりスムーズに、歩きやすくする。JSCでは、スポーツを実施するねらいには大きく分けて「身体活動/活動的な生活習慣」、「スポーツへの参加」、「国際競技力の強化」の3つがあると考えられるが、それぞれのねらいに違いはあっても、一つのアスリート育成パスウェイによってつながっている、としている。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-2] パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

<演者略歴>

兵庫教育大学大学院学校教育研究科修了。神戸市立市民福祉スポーツセンター支配人、文部科学省及びスポーツ庁障害者スポーツ振興室係長を経て現職。現在、日本パラスポーツ協会技術委員会推進部会委員、日本スポーツ協会地域スポーツクラブ育成委員会委員、愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会組織委員会理事等を務める。

東京2020パラリンピック競技大会は、障害者スポーツへの社会的関心を高め、「誰もが個々の力を発揮できる社会」の実現という理念を可視化する契機となった。しかし、障害のある人にとって、こうしたレガシーを活かした持続可能な「生涯スポーツ」環境は、いまだ十分に整っているとは言い難い。本発表では、パラアスリートのパスウェイを軸に、障害のある人が生涯にわたりスポーツに関わり続けるための条件や環境整備について、スポーツ実施における促進要因・阻害要因を含む具体的事例を交えながら検討する。特に、学校、スポーツセンター、自治体、民間団体など、既存の地域リソースを活用した団体間の連携により、選手の発掘・育成から競技力向上までを支える仕組みが構築されつつある現状を紹介する。新たな制度や施設を設けるのではなく、既存資源をつなぎ直すことこそが、持続可能な推進体制の鍵となる。こうした地域連携は、競技の普及と強化、さらには誰もがスポーツにアクセスできる社会基盤の整備に寄与すると同時に、トップアスリートの育成にも資するものといえる。地域で育った選手が全国や国際大会で活躍することは、障害のある人のスポーツ参加においてロールモデルとなり、当事者や周囲の意識を変える契機となる。また、競技を継続する上で鍵を握るのが、アスリートを取り巻く関係者である「アントラージュ」の存在である。本人の意欲や能力だけでなく、家族や指導者、医療・福祉・教育機関との連携を含む支援体制が、競技継続やキャリア形成に深く関わる。さらに、セカンドキャリアまでを見据えた中長期的な支援のロードマップを描くことが、スポーツ参加の質を高める上で不可欠である。本発表では、既存資源を活かした連携体制の構築、支援環境の整備、促進・阻害要因への対応といった観点から、障害者スポーツを軸とした持続可能なスポーツ社会のあり方について議論を深める機会としたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-3] “生涯スポーツライフ”を拡げるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

<演者略歴>

神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了。和歌山大学教育学部を経て、2023年より関西大学人間健康学部。マスターズ甲子園実行委員会副委員長、World Masters games 2027 Kansai交通・宿泊委員会委員、同・硬式野球運営委員会副委員長。2021年・第23回秩父宮スポーツ医・科学賞奨励賞受賞。

近年、世界的に広がりを見せているマスターズスポーツ（ムーブメント）は、「技を磨き競う」というスポーツが本来持っている楽しさに挑戦することを目的とするスポーツ実施のことを言い、世界各地でマスターズスポーツイベントが増加している。我が国でも国内のマスターズスポーツイベントや国際的なマスターズスポーツイベントが起ちあがってきており、2027年にはWorld Masters Games 2027 Kansaiが、コロナ禍の2度の延期を乗り越えいよいよ開催されることになっている。このことは、長く根付いていた「競技スポーツ」（トップスポーツ）と「生涯スポーツ」（グラスルーツスポーツ）の2項対立的な感覚・間隔に、徐々に変化をもたらしてきている。例えば、国内レベルの野球のマスターズスポーツイベントである「マスターズ甲子園」では、高校硬式野球を引退した後も硬式野球というスポーツにこだわり、同窓会チームを作って高校時代と同じように甲子園を目指す場を提供している。また一方で、世界最大の国際マスターズスポーツイベントと言われる「World Masters Games」では、参加資格は年齢のみと定められていることから、競技レベルに関わらずに世界一を目指す場を提供している。前者はスポーツ種目はそのままに、高校3年間という限られた期間と世代の枠を超えた競技の楽しさを拡げ、愛着のあるスポーツを一生継続していくことの意味や価値を深めることに貢献しており、後者は、競技経験が浅くてもかつてのオリンピック選手やプロ選手にチャレンジできるなど、楽しみ方のバリエーションを拡げる潜在力を大いに持っている。本シンポジウムでの役割として、これらの事例を紹介し、歳を重ねていく中でよりスポーツライフが多様に、豊かになっていく可能性と期待について共有しながら、トップスポーツやグラスルーツスポーツの垣根を超えた生涯スポーツ社会（の実現）について、議論する契機となれば光栄である。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

75歳以上人口は現在2,008万人、2050年代には2,400万人を超えると推測されており（令和6年版高齢社会白書、内閣府）、フレイル対策の重要性は益々高まっている。フレイル予防における体育・スポーツの役割を議論した昨年度のシンポジウムでは、人とのつながりの醸成、健康意識の低い人および閉じこもりがちの人へのアプローチの重要性が強調された。これらのことから、体育・スポーツには筋力維持等の身体的効果に加え、運動の同調性および楽しさ・気持ちよさ等を通じてコミュニケーションや外出を促す心理的・社会的効果も重要であると考え、本年度は、フレイルと孤立の関連性や高齢者が主体的に運営する運動サークルに携わる研究者等を招聘した。本シンポジウムでは、如何にして多くの高齢者、多様な身体的・心理的・社会的背景を持つ高齢者に運動の実施を促すか、そして、運動を通じて多様なつながりを醸成する意義と方法について考えたい。

[健康福祉-SA-1]

フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

[健康福祉-SA-2]

糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

[健康福祉-SA-3]

シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

[健康福祉-SA-4]

多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-1] フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

<演者略歴>

首都大学東京（現東京都立大学）人間健康科学研究科修了後、早稲田大学スポーツ科学学術院、カナダ・ウエスタンオンタリオ大学研究員を経て2017年より現職。

加齢に伴うフレイルとは、生理的な予備能力が低下し、心身に問題が起きた際の抵抗力が低くなる状態を示している。従来、フレイルは主に身体的脆弱性の特徴（Frailty phenotype）や、広範な健康障害の蓄積（Deficit accumulation frailty）に基づき評価されてきた。その後の研究や世界保健機関（WHO）の提言により、個々の機能低下に着目するのではなく、包括的な視点でフレイルを捉えることの重要性が認識されるようになってきている。このような背景から、社会的な健康リスク要因とフレイルの関連についても着目されてきているが、そこには問題も含んでいる。本シンポジウムでは関連する知見の紹介から、体育分野でのフレイル対策を社会的側面から考えていく。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線ー体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防ー

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-2] 糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

<演者略歴>

2017年より九州大学・准教授として勤務、福岡県糸島市の市民や九州大学の学生を対象とした疫学研究の主任研究者を務める。地域のフレイル予防と産官学民連携による健康づくりを推進している。大学内外で複数の専門職・委員も兼任。

フレイル予防をめぐる体育・スポーツの多面的な役割を議論する中で、演者は地域に根ざした研究の一例として「糸島幸福長寿研究」の取り組みを紹介する。高齢者が継続的に関わる運動支援をどのように設計し、社会的・心理的・身体的側面をどう捉えるべきか。本シンポジウムでは2つの研究成果を中心に考えたい。

1つ目は、遠隔通信を活用した運動教室の試みである。週1回60分、筋力トレーニングが主体のプログラムを、対面指導群と遠隔指導群に分けて3ヶ月間実施し、身体的フレイルの割合の変化を比較した。その結果、両群に違いはなかったが、終了後に遠隔指導の継続を希望した参加者はいなかった。音声や映像の不具合、視聴覚的負担の理由は想定していたが、「寂しかった」といった交流欠如も主な理由に挙げた。運動の場が身体のためだけでなく、他者と共に過ごす社会的・心理的空間であることを参加者の声から再認識した。

2つ目は、ウォーキングと身体的フレイルとの関連をみた横断研究である。地域在住高齢者846名を対象に、ウォーキング習慣の有無と他の運動の実施状況から4群に分類し比較した結果、ウォーキング習慣のみある群の身体的フレイルの割合は、運動習慣がない群と変わらなかった。一方、ウォーキングに加え他に運動している群や、他の運動を継続している群では身体的フレイルの割合が有意に低く、多様な運動の組み合わせがフレイル予防に有効であることが示された。また、「運動習慣」「社会参加」「活動量基準」を軸に8群で検証したところ、2項目以上に該当する人々で身体的フレイルの割合が低かった。

これらの知見は、単一の運動介入や手法では不十分であり、量・質・つながりからなる“身体活動のデザイン”が求められることを示唆している。今回は、データのみならず、参加者の意見も交えながら、身体的・心理的・社会的な視点で高齢期の「運動・スポーツのある暮らし」を考えるきっかけとしたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-3] シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

<演者略歴>

1994年筑波大学体育専門学群卒業、1996年筑波大学大学院修士課程体育研究科修了後、財団法人東京都健康づくり推進センター、株式会社T H F等に在籍。2015年に筑波大学大学院人間総合科学研究科（3年制博士課程）スポーツ医学専攻修了（博士 スポーツ医学）。現職は、駒沢女子大学人間健康学部健康栄養学科（教授）。

茨城県では、少子高齢・人口減少社会を見据え、平成17年から住民主体の介護予防事業として「シルバーリハビリ体操指導士養成事業」を展開している。本事業では、大田仁史氏が考案した介護予防体操「シルバーリハビリ体操」を普及する高齢のボランティア「シルバーリハビリ体操指導士」（以下、指導士）を養成し、住民自らが資源となり、住民が住民を育てる介護予防システムを構築してきた。

本事業では指導士の活動促進による介護予防や重度化防止を掲げ、体操普及活動による家族や高齢者自身の「自助」、地域社会で支え合う「共助」、公的制度の「公助」を組み合わせ、継続・機能していく体制づくりをしてきた。指導士は、概ね60歳以上（令和2年度より概ね50歳以上）の県民で、令和6年3月の指導士養成数は10,369人である。指導士は茨城県全44市町村に指導士会を設立し、行政と連携して活発な体操普及活動を展開してきた。体操普及活動は新型コロナウイルス感染症の影響で抑えられたが、令和5年度に開催された体操教室は延べ約3.5万回、参加高齢者は延べ約37万人、教室に携わった指導士は約12万人であった。

演者らは、シルバーリハビリ体操は、①指導士や地域で暮らす高齢者が取り組みやすく、両者の生活の質や生活機能の保持に有効で、長期にわたり安全に継続できる、②指導士の活力年齢は若く、地域社会での活躍が期待できる、③長期間かつ高頻度の体操普及活動に取り組む指導士はフレイル該当率が低く、精神的健康度が良好に保たれる可能性を報告した（2014, 2015, 2023）。さらに、指導士による体操普及活動は、地域における介護保険料、軽度の要介護認定率や介護保険給付費の抑制、健康余命の延伸に寄与する可能性も報告している（2014, 2015, 2017, 2023, 2024）。本事業は全国に広がっており（16道県97市町村、令和6年10月）、本シンポジウムでは地域における介護予防の推進に向けた住民主体の運動支援策の事例として紹介する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-4] 多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

＜演者略歴＞

1999年順天堂大学スポーツ健康科学部卒業。2001年中京大学大学院体育学研究科修了後、2014年まで（公財）日本パラスポーツ協会、東京都障害者総合スポーツセンターに在籍。その間、東京都健康長寿医療センター研究所協力研究員としても活動した。現職は東北福祉大学総合福祉学部准教授（2022年より）。

様々な身体運動を実施対象者の特性（障害、体力など）に応じてアダプテッド（adapted）することは、スポーツを含む身体運動の楽しさを享受することは基より、多くの対象者におけるフレイル予防の観点からも重要である。またスポーツは、動きのダイナミックさや速さ、滑らかさ等を競うものに限らず、障害等による動作の制限下においても主体的・能動的に身体を動かそうとする行動も含めた広義な健康増進活動として捉える必要がある。演者はこれまで、脳血管障害者を含む多様な疾患・障害を有する集団におけるスポーツ・フィットネス等の運動支援を中心としながら、約500名の障害者の体力評価、介護予防事業における一次・二次予防対象者と脳血管障害者における体力評価の分析、アダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスによる身体的・心理的・社会的効果を介入研究によって示唆している。一方でスポーツ的要素は、対象者が主体的に活動できるツールとして有用であるが、過負荷や転倒などのリスクが存在し、それらが起こり得る背景には障害や体力、技術、コンディションなど様々な要因が考えられる。地域の指導・支援者が対象者による主体的な行動・活動を支援する上では、対象者の挑戦する意思や意欲を尊重しながらも、安全で効果的な環境と支援体制を作ることが重要である。本シンポジウムでは、アダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスによる身体的・心理的・社会的効果を示しながら、スポーツの要素を用いたフレイル予防について、トレーニングリテリシーとリスクマネジメントの両面から考える機会にしたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

本部会では、「子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか」という上位課題に対して、子どもを誰一人取り残さず健やかな成長に寄与する健康・福祉について、JDEI (Justice, Diversity, Equity, Inclusion) の観点から、障害児と性別に焦点を当て、本シンポジウムを企画した。

まず、発育発達学分野から田中氏には、国際的に懸念されている身体不活動について、障害を有する子どもの身体活動量とその変動要因に関する国際機関Active Healthy Kids Global Allianceのアプローチに基づき、障害のない子どもとの比較からご紹介いただく。アダプテッド・スポーツ分野から内田氏には、インクルーシブな視点での授業実践について、最新動向をご紹介いただく。スポーツ文化ジャーナリストの宮嶋氏には、ジェンダー平等の理念により男女の混合種目が増加する中、機会をつぶさないことや場の提供の重要性について、海外事例を含め（諸外国と異なる日本のスポーツ導入の視点から、男女を問わず、本来の運動の楽しさを享受できるスポーツ環境整備について）ご紹介いただく。最後に、体操指導者の佐藤氏には、子どもの運動あそび・運動指導現場における豊富な指導経験からその留意点と障害を有することへの適応について、ご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1]

国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2]

インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

[健康福祉-SB-3]

性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

[健康福祉-SB-4]

幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える一誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツー

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-1] 国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

<演者略歴>

同志社大学文学部を卒業。中京大学大学院体育学研究科を修了。博士（体育学）。アーティスティックスイミング元日本代表。専門は、発育発達学、公衆衛生学（専門社会調査士）。子どもと家族の身体活動量促進を目的として、71の国・地域が参画する国際機関「Active Healthy Kids Global Alliance」の日本チームのリーダーを務める。

本報告の目的は、障害のある者となない者をともに含むすべての子ども・青少年の身体活動促進に関する国際的な動向、および日本の現状を概観することである。2020年に発表されたWHO（世界保健機関）Guidelines on physical activity and sedentary behavior（身体活動・座位行動ガイドライン）では、WHOのガイドラインとしては初めて、障害を有する人々などを対象とした推奨が含まれた。5～17歳の子ども・青少年と、同年齢の障害を有する子ども・青少年の推奨を見ると、身体活動・座位行動のいずれについても、推奨の数値的な部分は、障害の有無に関わらず同じである。

Guthold et al. (2020)によると、世界146か国における青少年の81%が身体不活動であることが報告されている。一方、障害のある者については、「Active Healthy Kids Global Alliance」に参画する57の国・地域のうち、身体活動量のデータを報告できたのは11の国・地域のみ

(20%)であった(Nget al. 2022)。このように、世界の多くの国が、障害のない青少年の身体不活動の状況を調査・報告しているのに対し、障害のある青少年を対象に調査する国は少ない。日本における既存の調査の主眼はスポーツ参加状況に置かれており、子ども・青少年の日常生活全般の身体活動量がわかるデータはほとんどない。障害を有する日本の子ども・青少年のスポーツ参加については、ソフト・ハードの両面において課題が多く、同年齢の障害のない人たちに比べ、総じてスポーツを行うことが少なく、行うスポーツのバリエーションも乏しい。本報告ではこれらの調査結果を紹介するとともに、障害のある者となない者をともに含むすべての子ども・青少年の身体活動・運動・スポーツを考える上での論点を提示して議論につなげたいと考えている。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える一誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツー

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2] インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

<演者略歴>

東海大学体育学部体育学科 教授。筑波大学体育科学研究科修了。修士(体育学)。筑波大学附属ろう学校(現:聴覚特別支援学校)、筑波大学附属中学校保健体育科教員として勤務。2005年より現職に着任。アダプテッド・スポーツ科学を中心に研究。「教養としてのアダプテッド体育・スポーツ」(2018 大修館書店)。

2024年4月から我が国では、改正障害者差別解消法は施行され、法律に基づき合理的配慮の提供が、努力義務から法的義務に変更となった。この法的義務の対象となる事業者は、これまで努力義務であった民間企業や私立学校も対象として含まれている。この変更は事業者によって受け止め方や進め方はそれぞれであるが、合理的配慮提供の取り組みは、進みつつある。一方、公的機関である、役所や病院、学校では、法的義務として合理的配慮の提供が進められ、それぞれの現場で実践は進みつつある。

今回、報告するのは「共に学び共に育つ授業」を目指し取り組まれた、授業研究についてである。この授業研究は、「令和の日本型学校体育構築」を目指し、各教科にて取り組まれている中の、体育、保健体育の授業研究である。この授業研究を通じ、次期学習指導要領を見据え、学校における教科教育、すなわち「授業のあり方」が問われている。

障害のある子どもたちの増加や児童・生徒の多様化への対応も含め、令和の学校は、これまで以上に福祉的な役割や子ども達の居場所としての機能を担うことが求められている。この学校の中核を構成するのは、授業である。その授業は、教科と教科外で構成されている。この授業の内容は、法的拘束力のある学習指導要領(本体)として告示されている。現行の学習指導要領には、「共生の視点」が示され、すべての教科においてインクルーシブな視点での授業実践が進んでいる。この共生の視点に基づき実践される通常学級の体育・保健体育の授業は、障害のある児童生徒が共に学び、共に育つ学習がプログラムとして組み込まれていなければならない。

すべての子どもたちにとって、個別最適な学びと協働的な学びの一つとしての体育授業は、具体的には、技能の習得に偏らず、思考力判断力表現力等に視点があるという様子がある。合理的配慮として提供され変更や調整があるインクルーシブを目指す、学校体育の取り組みについて、報告する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える一誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツー

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-3] 性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

<演者略歴>

テレビ朝日にアナウンサーとして入社後、ニュースステーションや報道ステーションのスポーツ特集を制作するディレクター兼リポーターを務める。早稲田大学非常勤講師、順天堂大学客員教授を歴任後、現在は日本女子体育大学招聘教授。一般社団法人カルティベータ代表理事、スポーツ文化ジャーナリスト、かめのり財団理事長。

2028年のロサンゼルスオリンピックでも男女混合の競技種目が増えてきた。男性も女性も平等にスポーツをする機会を持てるようにという理念はオリンピックによって牽引されてきたと言ってもいいだろう。長い間日本の学校体育の現場では世界の潮流とは異なり男女別習が行われてきたが、ダンスと武道が必須となり、男女共修の目的や理念も理解されるようになり、子ども自身や親の考えにも変化が表れてきた。しかし、中学女子の三分の一は身体活動が週に60分未満という調査結果もあり、運動嫌いの女子が存在することは否めない。部活動の地域展開が行われる中、特別な用具がなくてもできる体操やダンスは民間クラブなどでも人気だ。世界でも類を見ない見事な動きのハーモニーを見せる日本の男子新体操を行う子ども達の中に最近では女子の姿が見られるようになってきた。女子の新体操といえばレオタードに種具をもって華麗に演じるものであったが、男子新体操を行う女子たちは黒いスパッツの地味な衣装を着てバク転や静止技を繰り返していき。ここで大切なのは指導者の考え方だ。子ども達がやりたいと言ったときに指導者はどのような声掛けをしているのか。2024の大会で女子だけのチームが優勝して周囲を驚かせた。

長きにわたり女子種目であったアーティスティックスイミングにも今では男子加入が認められているが、1990年代に米国で一人の男子選手が女子だけに許されていた重い扉をこじ開けた。その指導者はどのように彼をサポートしたのか。選手への言葉がけは常にやりたいという意味を尊重するものだった。さらには指導者だけではなく、選手達が大会に出場できるように国内ルールを作って尽力してきた役員たちの存在も忘れることはできない。

またダウン症の障害を持った子ども達に運動の機会を積極的に与えている親の考え方など、本来誰もが持っている「スポーツをする権利」について改めて考える。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-4] 幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

＜演者略歴＞

日本体育大学体育学部卒業後、1993年よりNHK「おかあさんといっしょ」の第10代体操のお兄さんを12年間務める。2002年に有限会社エスアールシーカンパーを設立し、全国で親子体操や幼児の運動指導、指導者の育成を展開している。さらに2015年には、親子体操を研究課題に弘前大学大学院にて博士号（医学）を取得。

12年にわたるNHK「おかあさんといっしょ」での体操のお兄さんとしての経験や全国での親子体操教室、幼児・小学生の運動あそび指導や幼稚園・保育園・こども園の先生方への実技研修会に関わった経験から、子どもたちの体を通した運動やあそびの世界について紹介する。具体的には、2015年に弘前大学大学院で親子体操をテーマに博士号を取得した学位論文の知見や体操教室での夏・冬のキャンプでの経験も踏まえて、今まさに現場で起こっている課題や指導的配慮についても述べていく。子ども（幼児）の身体活動は「スポーツ」ではなく「あそび」が中心である。その「あそび」の何が大切で、指導者として何に配慮をしながら指導実践を積み重ねてきたのかを実践内容を交えながら述べていく。

また、自身においては2024年6月に脊椎梗塞を患い、現在もなおリハビリを継続している。病と向き合い、日々続くリハビリに取り組む中で実践してきたこと、運動が持つ可能性について、子どもたちの「あそび」との共通項を探しながら、私の経験を語りたい。そして、生涯を通した豊かなスポーツ（運動・あそび）ライフの重要性について参会者の皆様と共に確認できたらと考えている。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・イシューにいかに関与し、立ち向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター: 植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

世界各地で止むことなく続く国家・地域間紛争は、我々スポーツ科学者・実践者に、スポーツが「平和な社会の構築」の有力な手段であるという認識の再考を強く促している。戦地の拡大や難民の発生・集合・離散、繰り返される社会制度の構築・解体など日々刻々と変化する状況に直面した時、有効と思われた既存の方法が一瞬にして無力化したり成立しなくなったりする事態が起こりうるからである。しかしながら、このような不安定な状況下においても手は止めるわけにはいかない「支援」はいかにし得るだろうか。

このような問題意識のもと、スポーツ文化研究部会「課題A」では昨年度から「スポーツと平和」研究や現場での実践に関わって来られた研究者や実践者の方々をお招きし、理論（＝研究）と実践（＝現場での活動）の「現在地」を捉えることをねらいとして議論を行ってきた。前年度の「オリンピックにおける平和の理念・理論と平和構築実践」の理論的再検討の成果をふまえて、今年度は平和構築が喫緊の課題となってきた現場に深く関わって来られた3名の先生にご登壇いただき、これまでの取り組みの成果をご提示いただく。また、現場での実践過程で直面してきた問題や課題についてもお話いただき、スポーツを通じた平和構築実践の実相（現場のリアリティ）と支援のあり方に迫っていきたい。

[スポーツ文化-SA-1]

インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

[スポーツ文化-SA-2]

スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか

アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

[スポーツ文化-SA-3]

紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関わり向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-1] インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

専門は体育科教育学。博士（教育学）。筑波大学体育研究科終了後、小学校教員として職歴をスタートし、保健体育の教員養成に関わってきた。愛知教育大学を経て筑波大学体育系教授。現在は日本体育大学スポーツ文化学部教授。

本発表では、カンボジア、ミャンマー、ボスニア・ヘルツェゴビナ、南スーダンにおいて展開されたJICAの体育カリキュラムの開発、実施に関わるプロジェクトに専門家として従事してきた経験からプロジェクトの遂行に関わり現場で派生する課題について紹介したい。これら4ヶ国は期間の長短や時期が異なるとはいえ、いずれも内戦経験国であり、現在もその影響が残っている。また、体育のカリキュラム開発には公教育の保証に向けた取り組みであるとはいえ、体育の制度的な位置づけやその実行体制、能力も異なっている。他方で、プロジェクトの予算は規模が違うとは言え、配当されている。しかし、使い勝手がいいわけではない。この点を踏まえつつ、本発表では、1) 自分は受け入れられるのか、2) 言葉の意味は共有可能か、3) 成果を届けるシステムが存在しない、4) 現地での見えないステータス、手続きが存在する、5) カウンターパートが来ない、6) お金で動くわけではない、本音はどこにあるか、7) 自立に向けた自走と持続可能なシステム構築に必要な時間とは、という7つの課題を紹介し、スポーツを通じた平和構築にかかわるプロジェクトの実行段階の現場で派生する問題やその解決に向けた取り組みについて紹介したい。

なお、プロジェクトの現場という場合、企画が認められない、予算規模が不足する、専門家が常駐できない、あるいはいない、等々の問題も派生する。同時に、体育のプロジェクトという場合、競技化された近代スポーツの形態や競技の結果のみに目を奪われやすい。その結果、スポーツの持つ多様な価値に目が向けられなくなってしまうリスクも派生する。スポーツはプロジェクトの契機となり得るとはいえ、教育という課題のもとにおかれた体育の価値やその実現に必要な制度、文書、手続きにも目を向けることが求められる。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・イシューにいかに関与し、立ち向かうのか？

■ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-2] スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか
アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

<演者略歴>

2011年よりJICA海外協力隊としてケニアの児童保護措置所で活動。その後、Tokyo2020レガシー事業「Sport for Tomorrow」のコンソーシアム事務局での勤務や、大学院にてアフリカにおけるスポーツを通じた開発の実態について研究を行う。現在は（公財）日本アンチ・ドーピング機構に勤務する傍ら、一般社団法人A-GOALの代表として、ケニア・マラウイ・日本を主な拠点として、スポーツを通じた社会課題解決の取り組みを行っている。

本発表では、「平和」を、人々が互いの尊厳を認め合いながら共に生きることができる状態と定義し、スポーツが地域社会におけるセーフティネットとしてどのように機能し得るのか、アフリカでの事例を通して検討する。

ケニアでは、貧富の差が大きく、貧困層の人々は公的支援を得ることが困難な状態にある。ここでは、日々の生活を維持するために人と人とのつながりが、「ライフライン」として機能している。こうした地域において、多くの草の根のサッカークラブが、スポーツの場にとどまらず、ストリートチルドレンの保護、コミュニティスクールの運営といった多様な地域活動を行っている。サッカークラブの運営者が、そうした活動に取り組む背景には、様々な社会的要因があり、地域活動を通じた人とのつながりが、自らの暮らしを支える基盤となっている現実がある。

発表では、これまでの「スポーツを通じた開発」の研究において、十分に引き上げてこなかったスポーツの実相をより具体的に理解する手がかりとして、A-GOALの取り組みを紹介する。A-GOALでは、ナイロビのキベラスラムにおいて、複数の既存クラブや指導者とともにユースサッカーリーグを、年間を通して運営し、コミュニティの力を高めている。そこでは、政府系のプロジェクトなどで取られがちな「支援者と裨益者」といった2項対立的な構図ではなく、現地住民が主体となり、地域内での助け合いを日本や遠隔地から伴走的に支えるという関係性が築かれている。もともと、地域に根ざした活動を行い、人々のつながりを育み出している草の根のスポーツクラブとNGOが連携するからこそ、現地のニーズに根ざした活動や持続可能性の担保、その時々々の社会情勢（物価変動・災害等）に合わせた臨機応変な対応を可能にしている。

本発表では、スポーツがいかに関与し、地域のセーフティネットとなり得るのか考察するとともに、地域や立場を超えて広がる協働のかたちを考える機会としたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関わり向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-3] 紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

<演者略歴>

元競泳日本代表。アトランタ五輪4x200mリレー4位。マンチェスター大学大学院にて貧困・紛争・戦後復興の修士号を取得。国際協力機構（JICA）、国連児童基金（ユニセフ）のスタッフとして、約20年間発展途上国の平和構築・教育支援に従事。現在、聖心女子大学大学院で気候変動教育を研究する傍ら、スポーツ界の環境・気候変動対策およびジェンダー平等推進に取り組む。

国際的な紛争現場での緊急支援の現場において、「スポーツ」というセクターは未だメインストリームの地位を確立してはいないものの、心のケアの一環など、スポーツのプログラムはめずらしいものではなくなってきた。本発表では、小職が国連児童基金の教育専門家として、スリランカ（内戦）、マリ（内戦）、ギリシャ（難民）の緊急支援の教育プログラムの一環で実践してきたスポーツの活用事例、またモザンビーク北部の紛争地域でのNGOによるスポーツと平和のプロジェクトの実践事例を紹介する。緊急支援においてスポーツ・プログラムがどのようにその地位を確立してきたのか、目的、実施形態、予算配分、時間配分、効果測定、持続可能性等の観点からその効果や課題を検討したい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

近年、学校部活動の地域移行／地域展開をめぐる議論が活発化することで、自明視されてきた学校中心のスポーツのあり方が大きな転換点を迎えている。こうした転機に際して、本シンポジウムでは、日本における青年期のスポーツ文化がどのように形成・継承されてきたのかを、学校と地域という二つの実践の場に焦点を当てて検討する。

学校においては、体育や運動部活動が身体的健全性の育成や、競い合いを通じた向上心の習得、さらには社会的規範や責任感の涵養といった教育的価値の体现の機会として定位し、スポーツは学校教育における人間形成の重要な要素として位置づけられてきた。各時代の社会的要請を反映した教育政策や制度に連動しながら、青少年スポーツの主要な場として戦後の学校教育に深く根づいてきた。一方、地域スポーツクラブにおいては、年齢や立場を超えた参加を可能にし、個人のニーズやライフスタイルに応じた柔軟なスポーツの楽しみ方が展開されてきた。こうした地域社会の実践は、コミュニティ・スポーツや生涯スポーツの推進といった政策的な動向とも連動しつつ、地域に独自のスポーツ文化を育んできた。

本シンポジウムでは、これら二つの場において育まれてきたスポーツ文化の様相について、歴史的・制度的・文化的に捉え直しながら、それぞれの場ではいかなるスポーツ文化が構築・継承されてきたのかについて議論する。部活動の地域移行／地域展開という制度改革を単なる「再配置」として見做し、そのメリットとデメリットを性急に比較したり、その運営に要するリソースの問題へと足早に落とし込んだりするようなスタンスではなく、それぞれの場におけるスポーツ文化の具体像やその存在意義について深く視野を向けたい。バックグラウンドの異なる専門家・実務家をシンポジスト・指定討論者に迎え、青年期のスポーツ文化のあり方について多角的・批判的に検討することにより、より持続可能で包摂的なスポーツ実践のあり方、ならびに次世代のスポーツ教育の方向性を展望する機会としたい。

[スポーツ文化-SB-1]

運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響

教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

[スポーツ文化-SB-2]

学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化

体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

[スポーツ文化-SB-3]

子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-1] 運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響 教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士（教育学）。岐阜経済大学（現在、岐阜協立大学）、宮城教育大学を経て現職。日本部活動学会会長、日本体育科教育学会理事。

本報告では、運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響を教育言説の観点から読み解いていく。これまで学校でスポーツ活動に取り組む際に、その教育的意義が「体力づくり」「競争」「道徳」に見出されてきた。これらは学習指導要領の目標として、そして、内申書・調査書の評価項目として位置づけられてきたことによって教育現場に影響を及ぼしてきた。また、学校の対外試合の方針を定めた対外試合基準も、「体力づくり」「競争」「道徳」を理由に緩和され続け、各時代の教育政策を具現化する役割を果たしてきた。

しかし、これらの教育言説は、学校に部活動を位置づける論理として脆弱であった。実際に1969年以降、さらには、1998年以降に部活動の地域移行が進められたが、「体力づくり」「競争」「道徳」は学校でなくても取り組める教育内容でもあり、これらの言説は学校に部活動を位置づける根拠にならなかった。その問題は2008年以降の学習指導要領でも続いており、「総則」で示された部活動の方針に貫かれている原理は、依然として「体力づくり」「競争」「道徳」である。そのため、現在も学習指導要領の方針から部活動を捉える限り、学校に位置づける根拠を見出すことはできないのである。

そのような問題をふまえ、修正を図ろうとする対抗言説もあった。戦後初期の学習指導要領で提唱された「レクリエーション」言説であり、また、その言説を教師の専門性との関連で理論化しようとした宮坂哲文、城丸章夫、中村敏雄といった民間在野の研究者たちの主張である。しかし、それらの理論を推進する役割を果たすことが期待された教職員組合には、部活動よりも教師の労働環境の改善を重視する人も多く、この言説は一部の実践家に継承されるに止まり、3つの教育言説を批判・是正する勢力にはならなかった。今後のスポーツ文化の在り方を展望するうえでも、このような教育言説の歴史をふまえた議論が求められる。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター: 周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者: 中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-2] 学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化 体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

<演者略歴>

県立宮崎南高等学校、群馬大学教育学部卒、広島大学大学院修了（教育学修士：1994年）、福岡大学体育学部助手、財団法人福岡市体育協会嘱託職員を経て現職（2001年～）、日本体育社会学会理事、ロジェ・カイヨワの遊びの文化論（ミミクリ）を尊び、衣笠祥雄（広島カープ）の打撃模倣を特技とする。

「部活動の地域移行のことですか、行政と学校、それに地域の三者間の思いみたいなものが噛み合っていない状態が続いていますね。難題そのものです…。」直近にフィールドワークを実践した際、某県教育（スポーツ）行政指導主事から得られたコメントである。批判の学問である体育社会学の研究者としては実に興味深い。

スポーツ庁（文部科学省）が推進している部活動の地域移行・展開をめぐる今日の様相は、各自治体および地域事情により大きく異なっている。都道府県もしくは市区町村教育（スポーツ）行政による積極的主導をもとに、自治体単位で推進されている事例とそうでない事例とが混在しているのである。それもまた興味深く、研究関心を高揚させてしまう。上記したような部活動をめぐる今日の様相は「それが当然、それで構わない」のである。

スポーツが文化であること、そのことに疑いの余地は一切ない。但し、スポーツを取りまく「場」にもまた各々の文化が形成・醸成されてきた。文化とは、一義的な概念ではなく実に多義的なものである。教育社会学者である久富善之の文化論は「（組織・集団をめぐる文化とは）歴史的に選択され、形成され、継承され、また創造されながら変容していく」とされている。すなわち、スポーツに関与し続けてきた学校、地域、そして行政においては、各々に「スポーツへの関わりに伴って形成されてきた文化内容」が存在しているのである。しかるに、今日の学校部活動を取りまく構造変革の動向は、学校、地域および行政各々が有してきた個々のスポーツ文化（観）をめぐるコンフリクト（揺らぎ＝文化的営為）が生起されつつある状態との解釈こそ妥当であろう。当該のコンフリクトの「勝者」は、社会学的再帰論の観点からしても学校になるであろう（なるべき）と思えてならない。地域資源の活用を基軸とした学校「部活動」の再生は、社会に新たなスポーツ文化の創出をもたらすに違いない。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター: 周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者: 中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-3] 子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

<演者略歴>

中央大学文学部国文学科卒 卒業後出版社勤務→渡米→帰国後全日本柔道連盟にて企画広報課長。1996年アトランタ五輪、2000年シドニー五輪ではJOCプレスアタッシュとして全競技の取材対応責任者を歴任。2008年に独立し、2009年からスポーツひのまるキッズプロジェクトを展開。2025年度は柔道を中心に全国14か所で小学生の親子イベントを開催。2021年東京五輪・日本武道館メディアマネージャー。『柔道マガジン』発行人でもある。

「また、永瀬が変わったことをやりだした・・・」17年前、起業して2年目からスタートした『スポーツひのまるキッズ』、5年後に一般社団法人を立ち上げ事業を移してから一貫して実施したのは『スポーツで親子の絆を深め、子と夢をつなげる』こと。そして、その取り組みはやがて『スポーツのテーマパーク』を言われるようになり、数年前、『勝利至上主義につながるから』と全柔連が小学生の個人戦を主催しないと決定した時点で唯一無二の全国小学生柔道イベントとなった。『当たり前のことを当たり前でできる子供の育成』を掲げ、エントリーシートには『勝負だけにこだわる人の参加はご遠慮ください』と明記され、最高の賞は学年で1名しか選ばれない『マナー賞』。さらに、『一回戦で負ける人は半分、負けてからが勝負』とオリンピックが講師となって受け身コンテスト、打ち込みコンテストを実施し点数をつける。イベントが終わったら全国400社のスポンサーがバックアップする衣食住遊のブースで楽しみまくる……。試合、コンテスト、ブース参加ですべての規範となるのが『ひのまるキッズ六訓』。柔道以外の競技でもそれぞれの特性を活かしつつ『親子で参加』『マナー賞が一番』の形は崩さず展開している。今回は、これまで参加無償で実施されている部活動を地域で有償で継承するにあたり、すでに『道場』という地域活動の拠点を持っていた柔道界においてある意味ビジネス化できつつある要因を検証していきたい。「ライバルは？」と聞くと真顔で「ディズニーランドです」と答える弊社スタッフ代表として……。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ㊦ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

本シンポジウムでは、「多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは」をテーマに、共生の視点からみた保健体育の現代的課題やカリキュラムに係わる問題を共有し、今後について展望することを目的とする。本シンポジウムでは、保健体育のうち「体育」の授業に焦点をあてる。

昨今、多様性の理解や共生社会の実現が社会的課題として位置づけられ、教育課程においても実現のための手立てが示されるようになった。小学校・中学校学習指導要領（体育編／保健体育編、平成29年）、高等学校学習指導要領（保健体育編、平成30年）では、「豊かなスポーツライフの実現を重視し、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう、共生の視点を踏まえて指導内容を示すこと」が明記された。

制度としてのカリキュラムや枠組みが示された一方で、そのねらいとは反して展開されている授業や形骸化しているカリキュラムがあることも見逃してはならない。「共生社会の実現」や「豊かなスポーツライフの実現」を目指した学習指導要領の改正によって、体育は如何に変化したのだろうか、あるいは変化していないのだろうか。加えていえば、学習指導要領に記される共生社会や豊かなスポーツライフの実現は、すべての学習者が対象にされているのであろうか。

以上の問題意識から、本シンポジウムでは、体育授業における男女共習と障害のある児童生徒を取り上げ、実践研究の蓄積から得られたエビデンスをもとに現代的課題を共有する。さらに、ジェンダー・セクシュアリティの視点から学校体育やカリキュラムの問題について問う。本シンポジウムにおける問題提起から、性別や障害のある児童生徒に留まらず、多様な学習者が学び合う体育授業のあり方や共生社会の実現に向けた保健体育の可能性について考えたい。

[学校保健体育-SA-1]

男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

[学校保健体育-SA-2]

多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

[学校保健体育-SA-3]

体育は多様性を受け入れることができるのか？

ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏛 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-1] 男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

< 演者略歴 >

立教大学スポーツウエルネス学部教授。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程単位取得退学。弘前大学教育学部専任講師を経て、立教大学社会学部専任講師、助教授、現在に至る。3年間の弘前大学在職中は、同僚や附属中学校教諭らと「体育とジェンダー」について議論を重ね、新しい体育の在り方を実践した。

本発表は、「男女」がお互いを強く意識し合い、最も男女共習体育の実践が難しいと考えられる、中学校の男女共習体育授業について述べるものである。現行の学習指導要領解説保健体育編では、「原則として男女共習で学習を行うことが求められる」と示されている点をまず確認したい。しかし、「原則」故か未だそれが守られず、男女別習体育を実践し続けている学校が散見されるのが現状である。

さらには、「男女」共習という用語が独り歩きし、「男女」が一緒に体育の授業を受ければよいのだろう、と短絡的に解釈されているようにもみえる。そのため、グループ作りも「男女」同人数で分けられたり、スポーツが苦手な「女子」に配慮したルールで授業が進められたりといった実態が確認できる。これらが、少なからぬ中学校でまかり通っている「男女」共習体育の実際の一部である。

本発表者は、今、希求されているのは「ジェンダー平等な体育」の理念を有した「男女共習体育」であると考えている。

では、「ジェンダー平等な体育」とは、どのようなものであろうか。それは、あらゆるジェンダーの生徒の中で合理的な配慮が必要な生徒には配慮がなされた上で、ジェンダーに関わりなく、生徒達が共に学習することのできる体育ではなかろうか。そのため、グループの構成が同じジェンダーだけの場合もあれば、ランダムなジェンダーになる場合もある。スポーツが苦手な「女子」への配慮ではなく、スポーツが苦手な「学習者」への配慮が必要な場面はあるかもしれない。

このような授業を可能とするためには、体育を離れ、普段の学校生活の中でも、「ジェンダー平等」な実践がなされてなければならないであろう。そして、体育でのこのような試みが浸透していくことによって、「ジェンダー最後の砦」といわれるスポーツを学ぶ体育の時間が、学校内に「ジェンダー平等」を定着させる起爆剤ともなり得るのではないかと本発表者は考えている。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-2] 多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程修了。修士（体育学）。公立特別支援学校の保健体育科教員として勤務。小田原短期大学、いわき短期大学を経て東海大学児童教育学部特任講師。公認心理師。臨床発達心理士。特別支援教育士。日本体育・スポーツ・健康学会学校保健体育研究部会部会長。領域横断特別員会委員。

現行の学習指導要領の解説（小学校体育編／中・高等学校保健体育編）では、改訂の要点として「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する視点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」と示されており、共生社会の実現へ向けた学校保健体育の果たすべき役割として、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が含まれている。第三期スポーツ基本計画においても「生涯にわたって運動・スポーツを継続したい子供の増加」や「体育授業への参加を希望する障害のある児童生徒の見学ゼロを目指した学習プログラムの開発」が目標に掲げられており、運動につまずきがある児童生徒も含めたすべての子どもたちがどう身体活動を楽しみ、学びを深めるかは重要な教育課題と言える。

近年、通常の学級や特別支援学級の授業研究などでも教育現場を訪問する機会をいただいている。様々な相談の中には、協調運動の困難さを示す発達性協調運動症や肢体不自由等の体育の授業に直接関連する学習上の困難さだけでなく、授業におけるつまずきや失敗が不適応の原因になっているという事例がある。一方で、体育の授業を介して日常生活場面でも社会的な関わりが広がったという事例もある。

本シンポジウムでは、神奈川県立総合教育センターが令和の日本型学校体育構築支援事業の委託を受けて取り組んだ「共に学び共に育つ体育授業の調査研究」の成果と課題を交えた話題提供を行う。そこから得られた知見や教育現場からの声を参加者と共有しつつ、多様な学習者が共に学び、共に育つインクルーシブ体育のあり方について議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10～12:10 🏛 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-3] 体育は多様性を受け入れることができるのか？ ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

<演者略歴>

京都教育大学名誉教授。博士（学校教育学）。専門分野：体育科教育学、体育・スポーツとジェンダー研究。日本スポーツとジェンダー学会理事。近著：『どうして「体育嫌い」なんだろう ジェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』（2025, 大修館書店）

人々の多様性を考えるにあたって、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害などのカテゴリーがそれぞれ別個にではなく、相互に関係し、人びとの経験を形づくっていることを示すインターセクショナリティ（交差性）という概念を捉えることが重要である。「多様性を尊重」するとは、多様な側面を持つ個人の存在を認め、尊重するだけでなく、複合的な差別や権力関係、特権の交差に眼を向ける必要がある。

一方、学校体育の現状を見ると、エリート男性の教育手段として発祥・発展してきた競技スポーツが体育カリキュラムや運動部活動の中心に置かれており、経験でも能力でも優位な特権性を持つ者が制度設計や指導にあたっていることが常である。「ボールが怖い」「水着が嫌」

「体育がなくなればいいのに」という「体育嫌い」の子どもたちの思いがカリキュラム作成や指導の場にどれほど反映されているのか改めて問い直す必要があるだろう。例えば、「スポーツはすべての人の権利である」と謳われながら、スポーツでも学校でも性別二元制は絶対的な規範として機能している。男女に分けることによって見えなくなる存在は、置き去りにされている。また、学習指導要領の変遷とともに体育の目標が変化しても、実践段階での評価は相変わらず技能に重心が置かれている。

本発表では、「体育は多様性を受け入れることができるのか？」という基本的クエストに立ち、ジェンダー、セクシュアリティの視点から議論を深める。発表の構成として、(1)多様性とは何か (2)男はできて当たり前？ 女は嫌いでも仕方がない？ (3)競技スポーツ中心の学校体育の問題 (4)解決に向かうために を予定している。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

我々は実社会に求められる学校保健体育の課題を「身体」の教育と定め、児童生徒が主体的・対話的に学ぶ学校保健体育の可能性を検討している。昨年度のシンポジウムでは、変動練習の授業実装例の紹介から「身体を知る、護る、楽しむ」ことの重要性、バイオメカニクス研究による測定が児童の主体的・対話的な学習につながる可能性、自己調整学習の紹介を通じた児童生徒の主体的な学びを促す可能性、大学体育が再検討すべき課題と主体的・対話的な学びを高校から大学へ拡張する見通しが提案された。さらに、学びの一連のプロセスとして「内化・外化・新内化」が紹介され、ICTやAIの活用による効果について討議がなされた。

本年度のシンポジウムでは、学校保健体育の真正の学びの実現に向けて、ICTやAI等の技術支援の見通しを共有し、近年注目されているライフパフォーマンスと連携させることで児童生徒の学びが深化する可能性を検討する。この検討から、「身体」の教育を通底させた学校保健体育・スポーツ科学の新たな連携を提示し、「内化・外化・新内化」の往還が学校保健体育の真正の学びを実現すること、それがライフパフォーマンスの向上の一助となることを提案したい。

[学校保健体育-SB-1]

拡張のみのちのりとしての「外化・内化・新内化」

その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

[学校保健体育-SB-2]

ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

[学校保健体育-SB-3]

「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-1] 拡張のみのちのりとしての「外化・内化・新内化」 その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

<演者略歴>

金沢大学教育学部卒業、金沢大学大学院教育学研究科修了、金沢大学大学院自然科学研究科修了、博士(学術)。福井工業高等専門学校講師、福井大学教育学部講師・准教授を経て同大学教授。日本体育測定評価学会理事。

コロナ禍を経て、ICTを活用した実践をさらに推し進めようとする動きが高まった。この動きの中で試行錯誤されてきたICTの活用方法は、対話的な学びに一定の貢献を果たしていると評価される一方で、技能の獲得や改善・向上に直結させようとするものであるようにも捉えられる。学習者の興味・関心や学習意欲を高め、さらに主体的で対話的な学びを促進し、「深い学び」へ繋がられるようなICTの活用方法が求められる。とりわけ、学校保健体育領域においては、動きの可視化・客体化を目的にICTが活用される場面が多いが、動画撮影・閲覧に留まっているケースが大半である。ICTとバイオメカニクスあるいは運動生理学等の分野で代表される動きのキネマティクスや筋電図あるいは心拍数等とを組み合わせ、簡便にかつリアルタイムで授業実践に活用されているケースは稀である。導入に向けて、経済的なハードルをはじめ、授業者の活用スキル(パラメータの選択や提示方法)、学習者の情報を読み取る力(情報量や読み取り方)等、多くのハードルが想定される。本発表内容が今後の学校保健体育分野におけるICTの活用を通じた「深い学び」のきっかけになることを祈念する。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-2] ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

<演者略歴>

筑波大学第一学群卒業、筑波大学大学院体育研究科修了、筑波大学大学院人間総合科学研究科修了、博士（スポーツ医学）。早稲田大学スポーツ科学学術院助手、筑波大学スポーツR&Dコア研究員、独立行政法人日本スポーツ振興センター研究員・前任研究員を経て同センター副主任研究員。筑波大学体育系准教授（連携大学院）。

競技における最大限のパフォーマンス発揮には、体力や技術、心理に加え、疾患、用具、スケジュール、戦略・戦術等、多岐にわたる要因を望ましい状態に調整すること（コンディショニング）が求められる。コンディショニングは、アスリート自身がその知識や技能を備えて主体的に実践・継続できるようになることが重要であり、そのための支援が必要である。例えば、演者はコンディショニングの相談窓口（免疫機能を数値化し、主観や運動、睡眠、リカバリーを鑑みたコンディショニングを提案）、ハンドブックやセミナーを通じて、アスリートのコンディショニングのリテラシー向上を図った試みを進めている。このようなハイパフォーマンススポーツのコンディショニングの知見はライフパフォーマンスの向上に貢献できる可能性があり、その検討や取組みが始まっている。コンディショニングの知識や技能の習得、習慣化は早期になされることが望ましく、学校教育は最適な場であると考え。しかし導入には、学習指導要領や教員の負担、コスト、学習者の運動・スポーツへの興味・関心等、様々な観点の検討が必要である。本発表は、その課題解決の糸口を見出す場にできればと考える。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-3] 「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

<演者略歴>

千葉大学教育学部卒業、上越教育大学大学院修了、東京学芸大学連合大学院修了、博士（教育学）。大阪産業大学講師を経て長崎大学准教授。日本体育・スポーツ哲学会理事、日本体育・スポーツ・健康学会体育哲学専門領域運営委員。学校保健体育研究部会部会員（副部会長）。

本発表では、大学を含む学校保健体育における「身体」の教育を概観し、その教育と近年注目されているフィジカルリテラシーやライフパフォーマンスの向上との関係について検討する。例えば、フィジカルリテラシーは身体活動に取り組む全ての者にとって育成可能であり、学校保健体育における真正の学びや本質的な問いの設定に繋がる。また、ライフパフォーマンスの考え方は学校教育における「生きる力（未来を生き抜く力）」と類似する点が多く、この能力の向上は学校保健体育の目的の一つとなり得る。特に、学校保健体育では、主体的・対話的に学習（修）を進める過程で自己の心身の変化を自覚しながら調整して対応したり、先を見通す力が養われる。そこには他者への気付きも含まれ、生涯にわたる身体活動への動機、自信にも繋がるだろう。しかし、それらの適用には競技力の向上といった先鋭化の問題や数値による評価といったメリトクラシーの問題が生じる可能性があり、スポーツ科学や健康科学の知見を学校保健体育と連携させる際には注意する必要がある。学校保健体育で育成される能力は時代の要請によって変化するが、その基盤は「人間の身体」であり続けることになる。